明日を変えるチカラ

ジョンソン・エンド・ジョンソン
社会貢献レポート2017

明日を変えるチカラ

prologue

小さな出会いが、人生を劇的に変えてくれることがあります。何気ない一言が、前に進む勇気を与えてくれることがあります。ジョンソン・エンド・ジョンソンの願いは、すべての人が健やかに、希望を持って歩むことのできる社会を支えていくこと。明日は、昨日よりも、きっと、もっと素敵な日になる。私たちは、これからも支援を通じて、人々に寄り添い続けていきます。一人ひとりのチカラが、明日を変えるチカラになると信じて。

contents

02 prologue

04 special interview 1
口唇口蓋裂医療チーム派遣事業
あの子の笑顔が、
私の笑顔になる日。

10 special interview 2
TOMODACHI J&J災害看護研修プログラム
3.11の教訓を未来に活かせ。

16 かけがえのない、みらいへのタネまき

17 タネまき1
キッザニア東京・病院パビリオン
職業としての意識を高める
リアルな医療体験

18 タネまき 2
世界へ羽ばたく “Rikejo”
真の男女平等参画を目指して
いま、私たちがすべきこと

19 タネまき 3
ブラック・ジャック セミナー
一人でも多くの子どもたちを
次世代のブラック・ジャックに

20 topics1 第 13 回ヘルシー・ソサエティ賞

21 topics2 Donate a Photo

22 vision
ジョンソン・エンド・ジョンソンの
社会貢献活動

23 「我が信条 (Our Credo)」

24 各カンパニー代表からのメッセージ

26 summary

27 2017年に社員が参加したボランティアプログラム
とJJCCが助成した団体

29 2017年の数字で見る社会貢献活動

石橋耕三
ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社　メディカル カンパニー　エチコン事業部
ストラテジックマーケティングウーンドクロージャー ディレクター

橋本笙子さん
特定非営利活動法人アドラ・ジャパン　理事・事業部長

石川雄三さん
特定非営利活動法人アドラ・ジャパン　医療プロジェクト担当・東京衛生病院看護部師長

あの子の笑顔が、私の笑顔になる日。
口唇口蓋裂医療チーム派遣事業

special interview 1

「口唇口蓋裂（こうしんこうがいれつ）」は、顔面裂という顔の組織の一部が欠けた状態で生まれてくる先天異常の一つです。日本では生後6ヵ月までに形成手術を受けますが、世界にはそれができない子どもたちがいます。ジョンソン・エンド・ジョンソン日本法人グループでは、「特定非営利活動法人アドラ・ジャパン（以下、アドラ・ジャパン）」がネパールで展開している口唇口蓋裂医療チーム派遣事業（以下、事業）を助成しています。そこで、事業推進のキーパーソンの皆さまにお集まりいただき、事業への思いや喜び、これからの展望などについてお話しいただきました。

約五〇〇人に一人。
発生率に大きな
違いはない、
日本とネパール。

── 口唇口蓋裂医療チーム派遣事業に取り組むことになった経緯を教えてください。

橋本 中国とインドに国境を接する南アジアの小さな国ネパールは、エベレストをはじめとした美しい景観を持つ国です。しかし、経済的には非常に貧しい世界最貧国の一つと言われています。アドラ・ジャパンはこのネパールで、1989年から学校や診療所を建設するボランティア派遣事業などを行ってきましたが、こうした施設の建設以外にどのような支援が求められているのか調査を行ったところ、口唇口蓋裂の患者に対する手術の要望が非常に高いことがわかりました。

石川 顔の組織の一部が欠ける顔面裂には、さまざまなケースがあります。上唇が裂けた状態を口唇裂、上あごが裂けた状態を口蓋裂、その両方が裂けた状態を口唇口蓋裂と呼びます。 日本とネパールでは発生率に大きな違いはなく、約500人に1人の割合で生まれると言われています。

橋本 調査結果を受けたネパール政府からの要請もあり、アドラ・ジャパンでは1995年から事業を開始しました。

── 医療チームを派遣するには、ご苦労も多かったのではありませんか？

橋本 1995年3月に最初の派遣を行ったわけですが、その準備は本当に大変でしたね。アドラ・ジャパンは医療NGOではないので、ネパールのような国での医療活動に対する認識が甘かったのかもしれません。

石川 私が看護師として勤務している

差別を受けたり、コミュニケーションが取れなかったり…
深刻な問題を抱えている

病院がアドラ・ジャパンと経営母体が一緒だったことから、この事業の話が持ち込まれてきました。ただ、ネパールの医療事情を考えれば、医療活動に必要なものの多くは、すべてこちらで準備していかなくてはなりません。そこで、病院と取引のある業者の方々にお話をさせていただいたところ、ありがたいことに多くの賛同を得ることができ、スムーズに必要な医療物資を確保することができたのです。

石橋 ジョンソン・エンド・ジョンソン日本法人グループが事業の支援をするようになったのは、確か1996年からだと思います。私たちメディカル カンパニーのエチコン事業部では、手術に欠かせない縫合糸などを扱っています。そういう意味では、石川さんからお話を聞いて、それを支援することになったのは自然な流れであったといっていいでしょう。

いわれのない差別の中で過酷な生活を強いられる患者さんの実情。

── そもそもネパールの口唇口蓋裂の患者さんは、どのような状況におかれていたのですか？

橋本 アドラ・ジャパンの調査では、患者さんの多くがその見た目によっていわれのない差別を受けている実態が明らかになりました。いじめられるから学校に行けない、友だちができない、結婚できない、就職できないなどの悩みを抱えていたのです。中には、外見を家族から責められて耐え切れずに家を出たという方や、逆に親が口唇口蓋裂の子どもを捨てて家を出て行ってしまったというケースもありました。いまでこそ少しずつ変わってきていると思いますが、数年前までは家族や親族に生まれてきた子どもを殺すように言われることすらあったのです。

石川 問題は、見た目だけではありません。口唇口蓋裂を治療しないまま放置すると、母乳をうまく吸えずに成長が阻害されたり、発音の際に空気が漏れて周囲の人とコミュニケーションが取れなくなってしまうなど、多くの深刻な問題を引き起こします。そのため、できれば2歳くらい、言葉を覚え、話すようになる前に手術をしてあげたいのです。

石橋 先ほどもお話が出たように、口唇口蓋裂の発生率そのものは日本と変わりません。決して、ネパールが突出して多いというわけではないんですよね。

橋本 むしろ問題なのは、医療にアクセスできる機会がほとんどない、ということでした。そして、それに対応できるお医者さんが、少なくともこの事業が始まった頃はいなかった。日本のように保険制度がないのですから、基本的にはお金がない人には治療を受ける機会すら与えられない仕組みになっているのです。

ラムダとお母さん、いまでも忘れることができない、輝くような笑顔。

── 数多くの患者さんに出会ったと思いますが、特に印象に残っているのは？

橋本 2013年に行われたプロジェクトでのことです。ネパールの、遥か西の小さな村からラムダという生後7ヶ月の女の子がお母さんに抱かれてやって来ました。

石川 最初に問診をするのですが、ラムダのお母さんは何もしゃべりません。もちろん、ラムダがしゃべれるはずもありません。体重は6キロくらいしかなく、手術をするにはギリギリの状態でした。手術をすべきかどうか悩みましたけれども、遠くから何日もかけて来ているのだから、どうにかしてあげたいと思い、結局手術をすることになったのです。

橋本 実は、ネパールには100以上もの言語があります。言語が違う民族なのかもしれない、とネパール人スタッフがいろいろな言語で話しかけるのですが、それでもお母さんは答えませんでした。

石川 そうこうしているうちに手術の予定日が来て、いざ手術、という段になっても、お母さんはずっと沈んだ表情で黙りこくったままでした。印象的だったのは、手術が無事に終わってラムダが手術室から出てきた時のお母さんの表情です。

橋本 ラムダを見たお母さんのあまりの驚きように、我々スタッフも初めは何が起こったのかわかりませんでした。すると、それまで頑なに口を閉ざしていたお母さんがポツリポツリと話しだし、少しずつ詳しい事情を聴くことができたのです。お母さんは、「ここで娘は殺されるのだ」と思っていたそうです。ラムダが生まれてからというもの、お母さんとラムダが家族に受け入れられることはありませんでした。毎日のように「殺せ」と言われ、「お乳をあげなければそのうち死ぬのだから、もうあげるな」とまで言われたそうです。私も母親だからわかります。お腹を空かせた子どもに、母乳をあげないでいるというのは苦しいです。辛いです。お乳はパンパンに張って、痛いですし。ラムダ自身、口唇裂のせいで満足に母乳を吸うこともできなかったはずですが、そうした中でもお母さんは我が子に必死にお乳を含ませ、一人育て

当たり前のことが当たり前にできるようになること
それが幸せであるという真実

続けていたのです。

石川 お母さんのお兄さんがこの事業のことを知って、詳しく説明をしたそうです。でも、「殺せ、殺せ」と言われ続けていたこともあって、お母さんにはその説明が耳に入らず、むしろ「殺すように命じられた」と勘違いをしてしまったのでしょう。

橋本 そんな思いのまま、お母さんはこの子を抱いて、病院までやってきたのです。歩いて2日、バスに乗って1日半という時間をかけて。

どうか想像してみてください。自分の娘が殺されると思いながら、その娘を抱いてここまでやって来るお母さんの気持ちを。病院に来てから笑顔で帰っていく同じ境遇の患者さんの姿を見ていたはずなのに、それが目に入らないくらいお母さんは絶望の淵にいたのだと思います。それだけに手術後のラムダとお母さんの希望に満ちた笑顔は、いまでも忘れることができません。死を覚悟した絶望の時が、生きる喜びへと変わった瞬間でした。

願いはただ一つ。尊厳を取り戻し、普通の人生が送れること。

── 手術を終えた患者さんやご家族の喜び、それは言葉に尽くせないものがあるでしょうね？

石川 それはもう、人生が変わります。新しい命を与えられた、といっても過言ではないでしょう。小さな子どもであれば、友だちができたとか、学校に行かれるようになったとか、みんなと勉強ができるようになったとか。大人であれば、仕事につけたとか、結婚できたとか。そんな話を山ほど聞くことができます。

橋本 この事業の意義は、単に手術で見た目を治すだけでなく、人間の尊厳を取り戻すことにあると思っています。ある日本人の口唇口蓋裂の方とお話しした時に、「私は、きれいになりたいわけじゃない。ただ、普通になりたいのです。生まれた時に、もうマイナスからのスタートなのだから。ただ、それをゼロにしてほしいだけなのです」と言われたことがありました。この人の言葉は、とても重かったです。当たり前のように人と触れ合って、いい関係をつくり上げて、普通に暮らしを営んでいく。人が生きることとは、結局そういうことだと思うようになりました。

石川 ネパールでもここ数年は、口唇口蓋裂の子どもが生まれても悲観する必要はない、治るということが理解されてきています。派遣チームがいつ頃日本からやって来るのか、といった情報も広く認知されるようになり、多くの患者さんがネパール全土から集まるようになりました。そして、手術を受けたたくさんの患者さんが笑顔で帰っていくのです。

石橋 ジョンソン・エンド・ジョンソン日本法人グループとしては、もともとエチコン事業部から始まった取り組みではありますが、患者さんたちの笑顔とともにこの事業の存在や意義がグループ内でも広く認知されるようになりました。

── 現在の課題とこれからの展望を、それぞれのお立場から教えてください。

橋本 まず、この事業を現地の人たちだけで運営できる環境をいかに整えられるか。これについては、これからもネパール政府とともに地道な活動を続けていくしかありません。私たちとしては、将来的な事業の主体となる現地の医療者を育成すると同時に、日本の医療者がもっと積極的に参加できる体制を整えていきたいと考えています。もう一つ大切なのは、これはネパールだけの問題ではない、ということです。世界には、同じような状況におかれている患者さんがまだまだたくさんいます。そういう人たちにいかにアクセスするか、がこれからの課題になると思っています。

石川 初めてこの事業に携わらせていただいたのは、22年前、私がまだ30代の頃でした。いま思うのは、いつまで現役で続けていくことができるか、です。あくまでボランティア活動ですから、ほかの人に強制はできません。でも、いつか誰かにバトンタッチして、この事業を継承していってもらえたらいいなと。そのためには、多くの人に知っていただくことが大切です。日本という国は、非常に高度な医療を非常に安い金額で受けられる世界でも稀有な国です。そういう国に生まれた我々が、そうではない人たちに対して、何ができるかを一緒に考えていくことが重要なのだと思っています。

橋石 現地に行った社員は、事業に積極的に関わることで、一人でも多くの笑顔を増やしたいという思いを高めてきました。きっと、その実情や課題を目の当たりにし、患者さんの苦悩や喜びに実際に触れなければわからない何かを得て帰ってくるからなのでしょう。希望する社員がすべて現地に行かれるわけではないので、そういう意味では事業に参加した社員が自ら積極的に発信する機会をつくり、啓発活動の一助となってくれたらと思っています。

事業に参加した社員 ── ネパールで体験したかけがえのない財産を、もっと広く、たくさんの人に。

段ボールで50～60箱はあったでしょうか。膨大な量の医療物資を迎えのバスの屋根に積み込んでいく。それが、ネパールに着いた最初の仕事でした。病院に到着した翌日からは、ネパール各地から続々と集まってくる患者さんの誘導、名前や出身地などの個人情報の記入、顔写真の撮影、ネームプレートの配布などさまざまな作業に追われました。手術をはじめとする医療行為そのものも重要ですが、それ以外の環境づくりが本当に大切で、大変なことを実感しました。病室の飾りつけ作業からも、殺風景な病室で緊張している患者さんとご家族には、明るい雰囲気づくりが重要であることを学びました。

ジョンソン・エンド・ジョンソン日本法人グループから私と一緒に現地入りした社員は4名。「医師や看護師だけではできない、心に寄り添い、支えてくれる人の存在が患者さん方を勇気づけるんですよ」というアドラ・ジャパンの方の言葉にえも言われぬ喜びを感じることができたのは、実際に現地を訪れたからこその財産だと思います。今後は、もっと広く自らの体験を発信し、一人でも多くの笑顔を増やしたいと思っています。

エチコン事業部営業本部第6リージョン
ウーンドクロージャー京都ディストリクト
内川仁志

3・11の教訓を未来に活かせ。

TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラム

special interview

2

佐藤智行さん
TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラム3期生　岩手県立大学看護学部看護学科4年（2018年3月現在）

佐藤未佳さん
TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラム3期生　宮城大学看護学部看護学科4年（2018年3月現在）

「TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラム」は、ジョンソン・エンド・ジョンソン日本法人グループが協賛している東北復興支援プロジェクトです。公益財団法人 米日カウンシル-ジャパン*と駐日米国大使館が主導する官民パートナーシップ「TOMODACHI イニシアチブ」の教育を通じた被災地復興支援に賛同し、2015年から2017年までの3年間にわたり、東北の災害医療を専攻する看護学生の専門知識の深化、次世代を担うリーダーの育成を目的として実施されています。ここでは、第3期生としてプログラムに参加したお二人にお話をうかがいました。

*TOMODACHI イニシアチブを中核事業として、日米の人と人をつなぐ活動に参加・体験する機会を提供するプログラムの運営・助成を実施する公益財団法人です。
http://usjapantomodachi.org/ja/about-us/usjc-japan_operations/

看護師への思いに少なからぬ影響を与えた東日本大震災。

── 東日本大震災の時、お二人は中学3年生ですが、被災体験はその後の進路にどのような影響を与えましたか？

佐藤未佳 兼業農家だった宮城県の我が家では、被災による多少の不便はあっても、お米や野菜などの食材に不自由することはありませんでしたし、手動で発電できるラジオなどで情報を得ることもできていました。むしろ、よく知る石巻や気仙沼といった町が壊滅しているというニュースをラジオで聞き、驚くと同時に自分の恵まれた環境に申し訳なさを感じていたのをよく覚えています。

佐藤智行 私は岩手県陸前高田市の出身で、東日本大震災によって自宅が全壊・流失しました。その後、地域で一番山奥にある公民館で、3週間ほど避難所暮らしを経験しました。陸前高田市は最も甚大な被害を受けた市町村の一つで、九死に一生を得た人も非常に多くいらっしゃいます。私自身も被災したことで自然災害の恐ろしさを目の当たりにしました。

佐藤未佳 しばらくして沿岸部の被害状況をまとめた書籍が出版されたり、テレビでドキュメンタリー番組が放送されるようになったのですが、それらを見て衝撃を受けました。私が何もできないと感じていたまさにその頃、医療従事者の方々は自身も被災者であるにもかかわらず、津波で被害を受けた人たちに絶え間なく医療を提供していたのです。しかもそのプロセスが系統だっていて、とて

も訓練されていたことに感動しました。その時から人々の生活のすぐそばに寄り添い、健康を支え、困っている時に力になれる看護師になることが私の目標になりました。

佐藤智行 父が医療関係者だったこともあり、いずれは私も医療の道に進むものと思っていました。3.11の被災経験は、確かに私の心に大きな影響をおよぼす出来事でした。ただ、当時の私には、何か具体的なビジョンが描けていたわけではありませんでした。災害看護に興味を持つようになったのは、卒業後の進路を意識し始めた大学3年生になってからです。「災害看護論」という授業を受けるうち、「被災経験のある自分だからこそ、災害時に貢献できることがあるのではないか。被災者の気持ちを理解し、寄り添うことができるのではないか」という思いが芽生えてきたのです。

── 震災時の医療関係者の活躍は、確かに印象的なものでしたが、プログラムへの参加を決めたのはどういった思いからですか？

佐藤未佳 大学では積極的に災害看護プログラムを受講し、災害時に力になれる看護師を目指していました。日頃からより多くの人に災害時における看護の重要性を知ってほしいと思っていましたが、これまで自身が被災した体験を通じて、そうした話を他者に伝える機会は数える程度しかありませんでした。そこで、このプログラムへの参加が自身のスキルを高めるとともに、被災体験や災害看護の重要性を伝える機会になればと考えました。プログラムには米国スタディツアーも組み込まれていましたから、米国という文化や災害の特徴も異なる国の方々と被災体験の共有ができるという点にも魅力を感じました。

佐藤智行 先ほど話した「災害看護論」の授業で、去年このプログラムに参加された先輩のお話を聞くことができたのが大きかったと思います。もしこのプログラムに参加することができれば、より濃密な学びが得られ、災害支援看護師や、公益社団法人日本看護協会が認定する災害看護専門看護師、狭き門ではありますがDMAT*隊員など、目指している道の実現にも必ずや役立つだろうと確信しました。

*災害急性期に活動できる機動性を持ったトレーニングを受けた医療チームのことであり、災害派遣医療チーム Disaster Medical Assistance Team の頭文字をとってDMAT（ディーマット）と呼ばれている。

「できない己」を認め、自らの内面と向き合った米国スタディツアー。

── プログラムの目玉といえば、やはり「米国スタディツアー」だと思いますが、このツアーではどのような研修を受け、何を学び、何を得ましたか？

佐藤未佳 本プログラムは、主に①事前研修、②米国スタディツアー、③事後研修・報告会で構成されています。岩手、宮城、福島出身の看護学生8名が2017年8月5日から20日まで約2週間渡米し、ニューヨーク、ニュージャージー、ワシントンD.C.の3都市を訪問しました。

佐藤智行 そこで災害医療や看護を専門とする施設の見学や災害時のシミュレーション訓練のほか、アメリカにおける医療体制や、現地での生活に準じた医療やケアなどについて学びました。

佐藤未佳 特に印象に残っているのは、ジョージタウン大学で行った実際の患者さんを時系列に沿って看護していく、というシミュレーションです。被災して運び込まれた患者さんを第一のチームで看護。その6時間後を想定して、私たちのチームが継続看護をするのですが、指示も、トランシーバーから入る状況説明もすべて英語だったことで焦り、散々な結果に終わってしまいました。自分のことに精一杯で、ほかの人に指示を出すべき役割を担当していたのに何もできなかったのです。その悔しさもあって、帰国してから大学の教授に相談して、自ら災害看護のシミュレーションワークショップを企画しました。

佐藤智行 未佳さんは、英語でのスピーチも立派にこなしていたと思いますよ。私こそ英語がさっぱりわからなくて、何もできなかったというのが現実でした。「いつも大学でやっているように、みんなと和気藹々と学べればいい」というくらいの感覚でしたが、一緒に参加した仲間はもっと必死に取り組んでいました。甘い考えのまま、なんの覚悟もなくツアーに臨んだ自分が情けなくなりました。同時に、何もできない自分を嫌というほど思い知らされました。

佐藤未佳 誰もが今回のツアーを通じて、改めて自分にできること、できないことを認識したと思います。大切なのは、そのすべてを認めて、災害看護とこれまで以上に真摯に向き合うことだと思いました。

── 実にさまざまな経験をされた「米国スタディツアー」、その中で特に心に残っているエピソードをお聞かせください。

佐藤未佳 ニューヨークで出会った元看護師のPattiさんのお話が忘れられません。彼女は元消防士の夫とのイタリア旅行の最中に、同時多発テロの発生を知ったそうです。ニューヨークに戻ってから、生き残った消防士たちとその家族、殉職した消防士たちの家族が、辛い胸の内を互いに話すことで心の癒しを得るグループにボランティアと

聞く（Hear）と聴く（Listen）の違いを知る
真の看護が、そこから始まる

して参加しました。この活動を通じて、それまで彼らには辛い体験を話す機会も場所もなかったことに気づいたそうです。「きく」という言葉には二つの意味があり、音として耳に入ってくるものを聞く（Hear）という意味と、相手の言っていることを理解し、その人の思いを読み取るという意味の聴く（Listen）があります。看護ケアの中で重要とされる「傾聴」とは、後者を意味する言葉です。彼女曰く、ボランティア活動を進める中で、彼らの語りを聴き、その思いを読み取って彼らにフィードバックすることが彼らの癒しにつながっていったそうです。このお話は、私が看護師としてこれからの人生を生きていく上での大きな指針になると思っています。

佐藤智行 私の心に一番残っているのは、ニュージャージー州のジャージーショアでのハリケーン災害のお話でした。ジャージーショアはハリケーンの多い地域です。毎年のようにハリケーンがやって来るので、みんな慣れっこになっていました。しかし、2012年のハリケーン・サンディは想像以上の勢力で、油断した約500人もの方が逃げ遅れてしまったそうです。そのお話を聞いた時、自分が体験した東日本大震災の時も、多くの方々の心に少なからず似たような油断があったのではないかと思ったのです。そこで帰国後、故郷の高校生たちに災害の実態や災害への備えについて、もっと知ってもらうための活動を始めました。大学の仲間にも協力してもらいながら、私の母校や近隣の学校に連絡を取り、生徒の前で自ら学んできたことや体験してきたことを話して回っています。

――「米国スタディツアー」に参加する前と参加した後では、お二人の中にどのような変化（成長）がありましたか？

佐藤未佳 ツアーに参加する前は、米国での災害看護について、わからないことだらけでした。また、基本的に人の視線を集めることが苦手で、人前で話す際にはとても緊張していました。正直、質問があっても手を挙げられずにいることもありました。しかし、研修中は参加メンバーの誰よりも英語を話すという目標を立て、これを達成することができました。勇気を持って話すことを続けているうちに、ためらわずに質問できるようになったのは大きな成果だと思っています。自分のリーダーシップが持つ強みと弱みを知り、自分がなりたいリーダー像を具体的に思い描くことができたと思います。

佐藤智行 ツアーに参加する前の自分は、災害看護に関する知識を基礎的な部分だけしか持ち合わせていませんでした。自分に被災経験があるといっても、過去に起きた東日本大震災以外の災害については知らないことがたくさんありました。9.11 に関する講義やハリケーンの被災地訪問を通して、さまざまな災害に対する認識を深めることができたと思います。災害時の対応なども学びましたが、実践に移すには未熟な自分に気づき、さらに知識と経験を積んでいこうと決意を新たにしました。

身体だけでなく、傷ついた心に寄り添う看護師として。

―― いよいよ看護師として社会に出るお二人ですが、将来、どのような看護師になりたいと思っていらっしゃいますか？

佐藤未佳 災害は多くの人々の心と体を傷つけます。その傷は、時として、触れてはいけないもの、振り向いてはいけないものとして扱われます。過去を振り返ることで、苦しい思いを再び経験することになるからです。災害のことを振り返らないことは、一時的に災害のことを忘れ、前に進むためのよい手段のように感じるでしょう。時に人々は、そのようにして、自分の思いを打ち明けられず心の中にしまい込んでしまいます。しかし、一方で重い鉛をのみ込んだような苦しさが常に心に付きまといます。いつかは災害の体験と向き合わなくてはならない時が来るのは、病気や怪我でも同じです。

佐藤智行 確かに、自らの過去と向き合うことなしに、次のステップに進むことはできませんよね。

佐藤未佳 被災された方々がその体験の意味を見つけ、受け入れるその時に、隣にいる人の一人が看護師ではないでしょうか。傷ついた人に安心して思いを語れる場を提供し、じっくりと耳を傾けてくれる人がいれば、被災者にとって大きな助けになるはずです。看護師に求められる能力の中では、アセスメント（看護対象者を論理的に分析すること）が重要ですが、その基本は情報収集能力です。適切な情報収集には、きちんと聴けることが基本です。看護職を目指すものとして、「聴く力」を身につけ、「この人に話したい」と思われるような信頼関係を構築できる看護師になりたいと思います。

佐藤智行 日本が災害国家であることは、動かしようもない事実です。自然の中で生かされている以上、自然災害が起きてしまうのは仕方のないことであり、うまく付き合いながらどう生活をしていくかが重要だと思います。そのため、日本の災害医療・災害看護分野の発展に関して、今後、看護師として現場での経験を重ねながらも、自ら研究を続け、貢献できる看護師になりたいと思います。

プログラムの経験を活かして ― 災害看護のリーダーシップとして、広く情報発信していく。

2018 年 2 月 24 日（土）、都内の会場にて、「親子でつくろう！非常持ち出し袋ワークショップ」を開催しました。参加したのは、8 組の親子の皆さん。国家試験を目前に控えた忙しい時期にもかかわらず、JJCC の支援のもと、TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラムに参加した学生 8 人が協力して、企画から準備、運営までを担いました。ワークショップでは、まず学生たちが 2 週間の米国スタディツアーで学んだストレス（メンタル）ケアの重要性を紹介。各テーブルでの自己紹介を経て、特定非営利活動法人石巻復興支援ネットワーク代表兼子佳恵さんが被災体験や復興への歩みなどを話しました。辛くも力強く前に進む兼子さんのお話を聞いて、参加したお父さん、お母さん、子どもたちも一様に真剣な面持ちです。その後、親子で話し合いながら、非常時に何を持ち出したらよいのか、考えてもらいました。あっという間の 1 時間半でしたが、参加してくださった方々には、改めて災害に備えることの重要性を認識してもらえたと思います。また、学生たちにとっては、自らの使命と責任をもって情報発信していく、そんな災害看護のリーダーシップとしての自覚を促すイベントになりました。

かけがえのない、みらいへのタネまき

人に優しく、
豊かな社会を築いていくには、
その思いを受け継いで
実践する人材を
より多く社会に送り出すことが大切です。
ジョンソン・エンド・ジョンソンでは、
次世代を担う子どもたちを育むため、
さまざまな取り組みを行っています。
子どもたちが健康で心豊かに育ち、
希望に満ちた未来を担う存在になれるように。
私たちの取り組みの、
ほんの一部をご紹介します。

1
キッザニア東京・病院パビリオン
職業としての意識を高める
リアルな医療体験

2
世界へ羽ばたく“Rikejo”
真の男女平等参画を目指して
いま、私たちがすべきこと

3
ブラック・ジャック セミナー
一人でも多くの子どもたちを
次世代のブラック・ジャックに

キッザニア東京・病院パビリオン

職業としての意識を高める リアルな医療体験

上：肺がんの治療手術体験 ／ 二段目左上：救急救命士体験 ／ 右下：新生児の沐浴体験 ／ 左下：パビリオン外観

キッザニア東京とは

東京豊洲にある、現実社会の約2/3スケールの子どもサイズでつくられた「こどもが主役の街」です。日常の生活で目にするお店や乗り物がいっぱい。子どもたちはここでさまざまな仕事にチャレンジし、楽しみながら社会の仕組みを学びます。実在の企業がスポンサーとなって出展しているパビリオンは約60種類。ここでのリアルな職業・社会体験を通して、子どもたちはこれからの未来を生き抜く上で必要な力を育みます。

これからの世界の医療の明日を担う人へ

ジョンソン・エンド・ジョンソン日本法人グループは、キッザニア東京に病院パビリオンを出展しています。パビリオンでは、実際に医師や看護師や薬剤師、救急救命士として、手術や赤ちゃんのお世話、処方箋に合わせた薬の準備、救急活動等を体験することができます。医療という重要な仕事を幼い頃に体験してもらうことで、命の大切さ・命の重みを伝えるとともに、自分の体や健康への意識を高めることにつながれば、と考えています。医療に関わる仕事は、すべてチームワークが大切です。パビリオンでは、健康をテーマにしたさまざまなプログラムを実施し、子どもたちは互いに助け合いながら物事に取り組むことも学びます。

病院パビリオンの仕事

医師：肺がんの治療のための外科手術、および白内障の治療のための眼科手術をします。
看護師：新生児室で赤ちゃんのお世話をします。沐浴やマッサージなどを行います。
薬剤師：薬の準備や正しい薬の飲み方を伝える服薬指導の研修を行います。
救急救命士：救急車に乗って出動し、患者さんの応急処置を行います。AEDなどの機械も使います。

EVENT

しんぐるまざーず・ふぉーらむ*×
キッザニア東京×
ジョンソン・エンド・ジョンソン
コラボレーション企画
キッザニア訪問プログラム

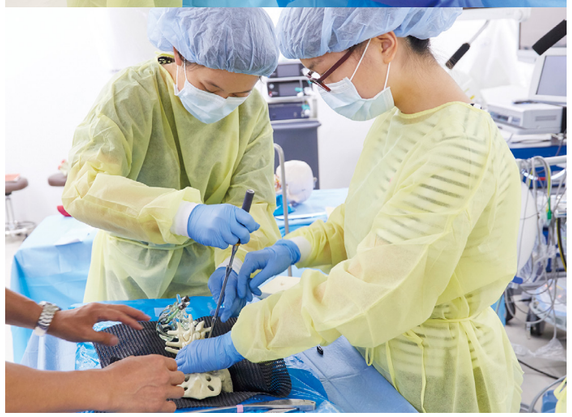
［日　時］2017年7月4日（火）15時～19時30分
［参加者］しんぐるまざーず・ふぉーらむ会員13世帯31名（うち子ども18名）

シングルマザーとして子どもを育てている母親と子どもたちが、ともに参加できるコラボレーション企画を実施しました。病院パビリオンでのアクティビティへの参加に加え、ボランティアスタッフを交えての食事会など、思い出に残るひと時を過ごしました。この体験をした子どもたちが、やがては未来の医療を担う存在へと育ってくれることを期待しています。

*シングルマザーが子どもと一緒にイキイキと楽しく生きられるよう、ママを勇気づけ、社会で活躍できる支援を行う特定非営利活動法人です。

世界へ羽ばたく“Rikejo”

真の男女平等参画を目指して いま、私たちがすべきこと



上：サイエンスツアーでの腹腔鏡手術体験／下：サイエンスツアーでの整形外科手術体験

女性を取り巻く あらゆる障害をなくすために

2017年の米大統領選挙で民主党の候補が、選挙運動中によく口にしていたのが「ガラスの天井」というフレーズです。「ガラスの天井（女性がキャリア形成する上で妨げとなる目に見えない障害）」をなくしていこう！と訴えていた通り、女性たちを取り巻く社会的環境には未ださまざまな制約があるのが現実です。2017年11月に世界経済フォーラムが発表した、ジェンダーギャップ指数*によると、日本は114位と過去最低を更新しています。大切なのは、こうした障害をなくし、いかに女性の可能性を拓いていくか。ジョンソン・エンド・ジョンソンでは、特に世界中の理系分野におけるダイバーシティを推進し、女性リーダーの能力開発を加速させるためにさまざまな取り組みを実施しています。

*「経済活動への参加と機会」（経済参画）「政治への参加と権限」（政治参画）「教育の到達度」（教育）「健康と生存率」（健康）の4分野の14項目で、男女平等の度合いを指数化したもの

東京大学との提携で 理系志望の女子学生を支援

ジョンソン・エンド・ジョンソンと東京大学の提携により進められているのが、理系分野における女子学生の活躍推進を目的としたプログラムへの支援です。このプログラムは、「“Rikejo” Initiative」と「女子中高生アウトリーチ」の二つのプロジェクトで構成されています。「“Rikejo” Initiative」では、理系の5学部（理学部、工学部、医学部、薬学部、農学部）から選抜された女子学生に対し、ジョンソン・エンド・ジョンソンが女性トップリーダーとの交流や、最先端の研究施設視察の機会を設けています。「女子中高生アウトリーチ」では、女子中高生に対して東京大学の理系学部の魅力や、大学卒業後の理系への進路選択における支援をしています。

EVENT

女子中高生 80 名に本格的な模擬手術トレーニングを提供
女子中高生サイエンスツアー

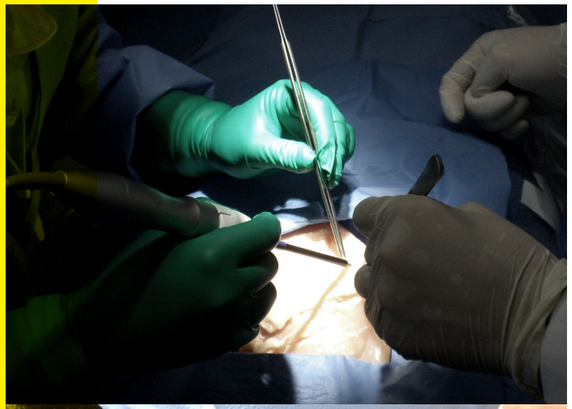
［日　時］2017 年 8 月 24 日（木）
［場　所］東京大学薬学部　本郷キャンパス 薬学部総合研究棟
［参加者］女子中高生80名（中学生 30 名、高校生 50 名）、保護者40名

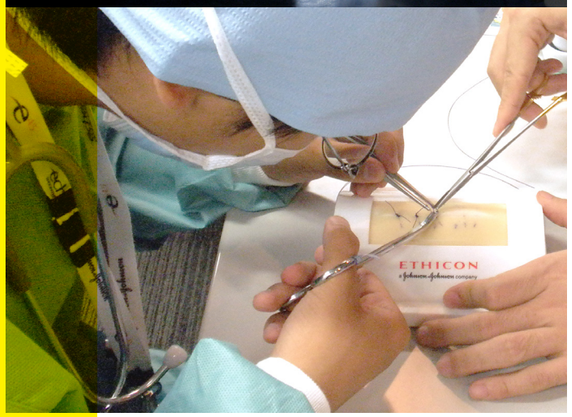
ライフサイエンス分野に関心のある女子中学生、女子高校生を対象にした「女子中高生サイエンスツアー」の一環として、本格的な模擬手術を体験できるプログラムを提供しました。ジョンソン・エンド・ジョンソンが国内外の医療従事者に医療トレーニングを提供している「ジョンソン・エンド・ジョンソン インスティテュート（東京サイエンスセンター）」を特別開放し、実際の医療機器と設備を使用した本格的な模擬研修を実施。参加者は、医療現場において需要が高い 6 種類の模擬手術を体験しました。

© Tezuka Productions

ブラック・ジャック セミナー

一人でも多くの子どもたちを 次世代のブラック・ジャックに





上：超音波凝固切開装置を使って鶏肉の切開／下：皮膚縫合体験

真摯な表情に見る ニッポンの医療の明日

手術着を身にまとい、グローブをはめた子どもたちの緊張の面持ち。臨床現場で実際に使われている機器を手に取る真剣なまなざし。「ブラック・ジャック セミナー」では、こんな子どもたちの真摯な表情を見ることができます。セミナー名の由来でもあるブラック・ジャックは、天才的な外科医として多くの人を救う手塚治虫氏の人気漫画のキャラクター。「医者の仕事とは何か」、「生命の尊さとは何か」、「お金より大事なものは何か」といった普遍的なテーマに対して、葛藤しながらも自らの技術をひたむきに追求し続けるヒューマンストーリーです。もしかしたら、セミナーを体験した子どもたちの中から、次世代のブラック・ジャックが生まれるかもしれません。

全国各地で年間約 60 回、 これまでに約 1 万人が参加

始まりは 2005年7月、子どもたちに「将来医師になりたい」、「医療に携わりたい」という興味を抱いて欲しいとの思いから、子ども向けの手術体験セミナー「キッズセミナー」を立ち上げました。その後、株式会社手塚プロダクションの協力を得て「ブラック・ジャック セミナー」として名称を改め、医療・教育関係者の支援のもと、現在まで約300回を超える開催を実現しています。セミナーの開催は、全国各地で年間約 60 回にもおよび、これまでに10,000 名を超える子どもたちが参加しました。セミナーを体験した子どもたちの中には、実際に医学部に進学し、医師を目指しているという人も少なくありません。より多くの子どもたちが夢と希望を持って医療従事者を目指し、将来の日本の医療に貢献してくれることを願っています。

ブラック・ジャック セミナーとは

ジョンソン・エンド・ジョンソンが全国の医療機関との共催により実施している子どもたち向けの手術体験セミナーです。手術着に着替えた子どもたちが、共催する医療機関の医師からの説明、指導のもと、実際に病院で使われている機器を用いて、手術縫合や心臓カテーテル手術など、4 ～ 6 種類の実技を体験します。開催病院ごとに外科、整形外科、循環器外科など体験する実技の種類が工夫されています。体験の終了後、修了式にて認定証が一人ひとりに授与されます。

★本セミナーは、手塚治虫氏が描いたキャラクター「ブラック・ジャック」が無免許であることや、法外な報酬を要求する点について賛同するものではなく、天才的な外科手術の腕前を身につけ、維持し続けるという医療に対するひたむきな姿勢や、常に、医者の仕事とは何か、生命の尊さとは何か、お金より大事なものは何か、を問う姿勢に共感してのものです。

The 13th Healthy Society Awards

第 13 回 ヘルシー・ソサエティ賞

TOPICS 1

ジョンソン・エンド・ジョンソン日本法人グループと公益社団法人 日本看護協会によって 2004 年に創設された、「ヘルシー・ソサエティ賞」は、昨年で 13 回目となりました。学術・教育、医療、ボランティア・市民活動などを通して、人々の健康、地域の保健、クオリティ・オブ・ライフの向上に多大な貢献をした個人、あるいは組織のリーダーを称え、表彰するものです。

ヘルシー・ソサエティ賞は、

- より健やかな社会を築くための個人の素晴らしい努力を顕彰する
- 国内外における、社会全体または特定のグループへの支援に対する功績を称える
- 慈善行為や寛大な精神、助けを必要とする人たちへの配慮を奨励する
- 他者への思いやり、人々の為に奉仕するという日本のよき伝統を奨励する
- これまで功績が広く認識されてこなかった個人、及び既に高い評価を受けている個人を対象とする

この賞を通じて、国民の健康、地域社会の福祉、さらに生活の質の向上のための有意義な活動が、より広く普及することを心から願っています。

13 回目は、教育、医療、ボランティアの分野で指導的な役割を果たしてこられた 4 部門 5 名の方が受賞されました

教育者部門

工藤 翔二（くどう しょうじ）

公益財団法人 結核予防会 理事長

びまん性汎細気管支炎（DPB）に対する「マクロライド少量長期投与療法」を確立した呼吸器内科のパイオニア。特発性間質性肺炎の診断基準改訂と、病態解明、びまん性汎細気管支炎の遺伝性要因の解明、COPD の普及啓発を行うなど、呼吸器疾患の治療に欠かせない功績を残してこられました。

ボランティア部門（国内）

増田 靖子（ますだ やすこ）

全国脊柱靱帯骨化症患者家族連絡協議会 会長
一般財団法人北海道難病連 専務理事

難病医療の枠を超えた地域福祉向上のための活動として、北海道全土の医療過疎地域に赴き「家庭でできるリハビリキャラバン」を開催。また、厚労省の脊柱靭帯骨化症の研究に積極的に協力し、創薬の可能性を開くなど臨床医学研究に貢献してこられました。

ボランティア部門（国際）

鬼 一二三（おに ひふみ）

一二三日本語教室 学校長
123 図書館 代表

カンボジアのシェムリアップ州で 20 年余に亘り、日本語教育や文化交流に尽力。公益財団法人社会貢献支援財団より社会貢献者表彰を受賞。現在も日本語教育から人材育成まで活動を続けておられます。

医療従事者医療介護部門

桑原 正彦（くわばら まさひこ）

医療法人 唐淵会 桑原医院 院長

「小児救急電話相談事業・広島」の実現を通じて、のちの小児救急電話相談事業（# 8000）の先駆けとなられました。その後、小児救急電話相談事業基本問題検討委員会の事務局長に就任。現在も事業の推進に力を注いでおられます。

医療技術者（イノベーター）部門

五十嵐 良雄（いがらし よしお）

医療法人雄仁会 メディカルケア虎ノ門 理事長、院長

うつ病・不安障がいのリハビリテーションにおいてデイケアでの復職支援を中心に活動。うつ病リワーク研究会を立ち上げ、代表世話人を務められるとともに、日本うつ病学会評議員、日本デイケア学会副理事長、日本産業精神保健学会理事などを務めておられます。

（敬称略）

Donate a Photo

好きな写真をアップ それが寄付になる 無料のモバイルアプリ

TOPICS 2

テクノロジーの進化、SNS の普及によって国境や時差を越えて、世界中の人々が手のひらでつながり合える現代。人と人とがつながり、喜びや悲しみ、何かを成し遂げたいという思いを共有できるいまだからこそできる新たな社会貢献。そんな発想から生まれた「Donate a Photo」は、誰もが気軽に参加できる、想像以上に簡単な社会貢献のカタチです。

ジョンソン・エンド・ジョンソンが提供する無料のモバイルアプリ、「Donate a Photo」は、2013 年に米国で導入され、2016 年には日本でも運用が開始されました。使い方は簡単です。専用アプリをダウンロードし、スマートフォンなどで撮った写真を投稿するだけ。すると、1 枚につき 1 ドル、投稿者が支援したいと思うプログラムにジョンソン・エンド・ジョンソンが投稿者に代わって寄付をするという仕組みです。寄付は、病気の子どもやその家族の支援、東北への食糧支援など、さまざまな支援プログラムに役立てられます。

プログラムのカテゴリー

- 女性と子どもの健康
- 健全な家庭
- 保健医療
- 環境保全
- 世界的な疾患の問題
- 必要不可欠な手術
- 教育と機会均等
- 緊急支援

世界中で約20万人が参加、300万枚以上もの写真が投稿され165ものプログラムを支援

日本でも 7万枚以上の写真が 投稿され、 11のプログラムを支援

使い方

1. 無料モバイルアプリ Donate a Photo をダウンロード

Google Play　App Store

2. 支援するプログラムを選択

今支援できるプログラム

- 口唇口蓋裂、顔面奇形の障害を持つ子どもたちへの支援
- 難病の子どもとその家族への支援
- LGBT教育への支援
- 外国にルーツを持つ子どもへの日本語の学び場、居場所の提供
- 新生児の蘇生をサポート

2017年に支援完了したプログラム

- ハリケーン・ハービー被害者支援
- アジア・アフリカの貧しい学校の子どもたちの視力検査
- 栄養失調の子どもたちに食料を届ける活動
- 病気の子どもとその家族のための滞在施設の提供
- 自殺防止電話相談の相談員育成
- 日本各地を襲う水害で泥出しに必要な土のう袋の提供

3. 「すぐに寄付する」をタップ

4. アプリで写真を撮るか、ご使用の端末内の写真を一枚選択

5. 選択した写真を投稿（風景や人物など、公開できる写真ならどんなものでも投稿できます）

6. 写真は Donate a Photo ギャラリーに表示され、facebook、twitter、Instagramで公開することもできます

7. ジョンソン・エンド・ジョンソンが投稿者に代わって、選択したプログラムに 1 ドルを寄付します

8. 1 日 1 枚、毎日写真を投稿（＝寄付）することができます

（2018 年 4 月現在）

vision

いつの時代も変わらない信念を胸に刻んで

ロバート・ウッド・ジョンソンJr.によって1943年に起草された「我が信条(Our Credo)」は、世界中に広がるジョンソン・エンド・ジョンソンのすべての企業活動の拠り所となってきました。社会的責任という概念は、企業にとっていまや常識となっていますが、ジョンソン・エンド・ジョンソンでは70年以上も前から、それを変わらぬ行動規範として胸に刻んできました。そして、これからも地域社会と共に歩んでいきたいと考えています。

我が信条

我々の第一の責任は、我々の製品およびサービスを使用してくれる医師、看護師、患者、そして母親、父親をはじめとする、すべての顧客に対するものであると確信する。顧客一人一人のニーズに応えるにあたり、我々の行なうすべての活動は質的に高い水準のものでなければならない。適正な価格を維持するため、我々は常に製品原価を引き下げる努力をしなければならない。顧客からの注文には、迅速、かつ正確に応えなければならない。我々の取引先には、適正な利益をあげる機会を提供しなければならない。

我々の第二の責任は全社員 ――世界中で共に働く男性も女性も―― に対するものである。社員一人一人は個人として尊重され、その尊厳と価値が認められなければならない。社員は安心して仕事に従事できなければならない。待遇は公正かつ適切でなければならず、働く環境は清潔で、整理整頓され、かつ安全でなければならない。社員が家族に対する責任を十分果たすことができるよう、配慮しなければならない。社員の提案、苦情が自由にできる環境でなければならない。能力ある人々には、雇用、能力開発および昇進の機会が平等に与えられなければならない。我々は有能な管理者を任命しなければならない。そして、その行動は公正、かつ道義にかなったものでなければならない。

我々の第三の責任は、我々が生活し、働いている地域社会、更には全世界の共同社会に対するものである。我々は良き市民として、有益な社会事業および福祉に貢献し、適切な租税を負担しなければならない。我々は社会の発展、健康の増進、教育の改善に寄与する活動に参画しなければならない。我々が使用する施設を常に良好な状態に保ち、環境と資源の保護に努めなければならない。

我々の第四の、そして最後の責任は、会社の株主に対するものである。事業は健全な利益を生まなければならない。我々は新しい考えを試みなければならない。研究開発は継続され、革新的な企画は開発され、失敗は償わなければならない。新しい設備を購入し、新しい施設を整備し、新しい製品を市場に導入しなければならない。逆境の時に備えて蓄積を行なわなければならない。これらすべての原則が実行されてはじめて、株主は正当な報酬を享受することができるものと確信する。

Johnson & Johnson

各カンパニー代表からのメッセージ

一人ひとりが社会とのつながりの窓口

日色 保 社会貢献委員会チェアマン ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社 メディカル カンパニー 代表取締役プレジデント

世界的にもよく知られるジョンソン・エンド・ジョンソンの企業理念である「我が信条（Our Credo）」。その際立った特徴の一つは、会社の事業活動に直接関わる顧客や社員に対しての責任に加え、我々が企業活動を行う地域社会への責任について独立して言及していることです。ここでは、会社は社会の公器であると明確に示されていますが、会社は一人ひとりの社員の集合体ですから、全社員が社会貢献活動の体現者でなければなりません。会社として、社会と良好なつながりを持ち続けることに力を注ぐと同時に、社員の一人ひとりが社会のさまざまな課題に関心を持ち、地域の人々の立場で、よき市民としてのあるべき姿に向けて実践していくことが必要だと考えています。奉仕の精神が培われることにより、社会の枠組みの中で、会社やビジネスが果たすべき役割を考える力も養われますし、ヘルスケアの分野で事業を展開するジョンソン・エンド・ジョンソンにとって、仕事への責任感と誇りを高めることにもつながると信じています。

お客さまの暮らしに寄り添い、健やかで、活力あふれる社会のために

マリオ・スタイン ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社 コンシューマー カンパニー 代表取締役プレジデント

コンシューマー カンパニーは、お客さまの暮らしの最も近くに寄り添う存在として様々な活動を展開しています。時代を超えて世界中で長く愛され続けるブランドとともに、多様化するニーズに対して、皆さまの心を躍らせる、そして価値あるブランドやサービスを提供することで、お客さまの健康、さらにはより豊かで活力に満ちあふれた生活の実現に貢献してまいります。

上記にある「世界の人々に愛される製品を通して、お客さまのより豊かな生活に貢献する」という目標を実現するため、私たちコンシューマー カンパニーは「我が信条（Our Credo）」にある「地域社会への貢献」を非常に重要な活動のひとつと捉えています。そのため、2017年は児童養護施設等で生活している子供たちが楽しいクリスマスを過ごせるように、全社員が一緒になってクリスマスカードを作成して、各施設にお届けしました。また、リーダーシップチームのメンバーは、弊社オフィスでスワンベーカリー（障がいがある方を積極的に雇用されているパン屋さん）の販売をサポートすると同時に、コンシューマー製品を社員に販売して、売り上げの一部を日本赤十字社を通じて熊本へ義捐金として送りました。また、ボランティア月間では例年よりも多くの社員が様々なボランティア活動に参加しており、2018年も社員のボランティア活動への参加を積極的に奨励していく予定です。

クオリティ・オブ・ビジョンを通じて、よりよい社会と暮らしのために

海老原 育子 ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社 ビジョンケア カンパニー 代表取締役プレジデント

私たちビジョンケア カンパニーは、クオリティ・オブ・ビジョンに貢献することをミッションとして、さまざまな技術革新や、研究開発を通して日本の患者様、医療従事者、消費者、皆さまのお役に立つべく活動しています。クオリティ・オブ・ライフ向上にクオリティ・オブ・ビジョンは非常に重要な役割を果たすからです。人間が得る情報の中で目から得る情報は質量共に非常に大きく、目の健康が損なわれると、その人の生活や社会との関わりが激変してしまいます。

ビジョンケア カンパニーでは、「目の健康」を推進する中で、アイバンクの活動を支援しています。角膜センター・アイバンクが主催する角膜移植医療への理解と啓発を図ることを目的としたチャリティーマラソン大会「ラン・フォー・ビジョン®」に1998年の大会発足時より協賛しており、社員も毎年ランナーとして参加しています。

今後も「我が信条（Our Credo）」に基づいた活動を継続し、地域社会に貢献していきたいと考えています。社会貢献活動はその姿勢を具体化するものであり、経済的支援だけでなく、社員の自発的な活動を奨励し、会社全体として社会に貢献できるよう努めています。

国際的協働の積極的な推進により、ヘルスケアの課題解決に貢献

クリス・フウリガン ヤンセンファーマ株式会社 代表取締役社長

ヤンセンファーマ株式会社は、患者さんの医薬品へのアクセス向上のために、リーダーシップとパートナーシップを通じた外部環境の整備の必要性を感じており、ヘルスケアの課題を早期に解決できるよう官民パートナーシップ（PPP）を積極的に推進しています。

国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）との初会合では、認知症や薬剤耐性菌等の高齢化社会の特徴に特化した疾患をテーマに、欧州PPP組織「革新的医薬品イニシアティブ」（IMI）の学びを得て、我が国のPPPのあり方を討議できたことを大変嬉しく思います。

2030年には世界で7400万人が罹患すると推定される認知症は私たちの健康や国家経済にとって大きな脅威となっており、また、薬剤耐性菌は世界規模で対策が急務です。そのような中、ダボス会議で薬剤耐性菌に対する研究開発で世界的ベンチマーク企業に選ばれました。

また、私どもは日本国政府、製薬会社、ビル＆メリンダ・ゲイツ財団、ウェルカムトラスト公益信託団体、国連開発計画を含むPPPである公益社団法人グローバルヘルス技術振興基金（GHIT）への支援を通じ、日本のイノベーション、投資をグローバルにもたらし、発展途上国における感染症や貧困に取り組む国際的協働を積極的に推進しています。

summary

地域社会に対する責任を果たすために「いま」できること

ジョンソン・エンド・ジョンソンでは、「我が信条（Our Credo）」の第三の責任「地域社会に対する責任」を果たすため、「ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会（以下、JJCC）」を結成しています。JJCCは、グループ各社で参加の意思を示した社員ボランティアによって運営されています。そして、地域に密着したパートナーとの協働で、からだやこころ、社会の健康をテーマとしたさまざまな支援への取り組みを実践しています。

JJCC が主体の活動

* スワンベーカリー（障がい者の雇用と自立支援を応援する会社）の販売会をサポート
* 買うボラ：社員が物品を購入することで支援団体や被災地の活動を支援する目的の販売会（ラ・バルカのバレンタインデー・ホワイトデー企画／宮城・岩手・福島・熊本の物産品販売会）
* チャリティー・サークル：社員が自らのスキルや趣味を活かし参加費を寄付する活動（スマホで素敵な写真を撮ろう／マインドフルネス・メディテーション／ヨガインストラクターによるヨガ講座／英語レッスン：正しい言葉とふさわしい言葉〜英語と日本語の違いから〜）
* ワーキングママによる子ども服チャリティーバザー：収益を東北の子どもたちを支援する NPO 団体に寄付
* 児童養護施設「鐘の鳴る丘少年の家」から自立する男子高校生に、生活用品を寄付
* シングルマザーの方々のために、スーツやバッグを集めて寄付
* 社員から集めた古本や CD、DVD、書き損じハガキなどで得た収益を、アドラ・ジャパンへ寄付
* ドリンク1本につき10円が寄付となる社会貢献自動販売機「夢の貯金箱」を社内2ヶ所に設置
* 使い捨てコンタクトレンズの空ケースを回収し、得られた対価を（財）日本アイバンク協会に寄付する活動を支援

社員が自発的に参加したボランティアプログラム（一例）

東北の地酒を飲んで復興支援！／南三陸復興支援の旅〜被災地を「見て」「聞いて」「感じて」そして支援をしよう〜／東北三陸ボランティア／「高校生が伝える ふくしま食べる通信」を発信する福島の高校生たちとの交流会／気仙沼で障害のある子ども達と遊ぶ〜自閉症児　放課後等デイサービス支援／【福島】オックスファム トレイルウォーク運営ボランティア／ふくしまオーガニックコットンプロジェクト　サポートボランティア／福島の今を知ろう！ 浜通り Study Tour／海、浜の掃除　宮城県石巻 〜震災後遊べなくなった海をきれいにして子どもたちが安心して遊べる海にするための活動／陸前高田仮設住宅団地草刈り／毎年恒例　宮城県南三陸町被災地で「今」を知ろう！／南三陸ボランティア／東京マラソンボランティア／スノボ経験者必見！子ども

2017年に社員が参加したボランティアプログラムとJJCCが助成した団体

* DV などの被害で都内のシェルターに暮らす方々のために、婦人服を集めて寄付
* 震災で被害を受けた子どもたちのために、絵本を集めて NPO 法人「地球の楽好」絵本バス活動に寄付
* 九州北部豪雨被害の報を受け、社員から義援金を募り、同時に清掃に必要なタオルを回収して寄付
* 熊本地震の被災地復興におけるコミュニティ支援として、社員の募金を含む総額 500 万円を寄付
* 月例イベント：さまざまな社会問題の実態を知り、ともに考える月一回のイベント、参加費を NPO 団体に寄付（<社会問題を知る>産後うつ／強い組織のつくり方〜幸せをロジカルに科学する〜／子どもの貧困／<日本の今を知ろう>（外国ルーツの子どもたちを取り巻く学習・進学の現状と課題）
* コントリビューション・ウィーク 2017：4つの支援団体の代表を招いて JJCC の助成している活動を紹介、参加費を団体に寄付
* NPO パートナーシップデイ 2017：JJCC の支援する NPO 団体を招き、真のパートナーシップを築くとともに、NPO 団体同士の交流・意見交換の場を提供
* キッザニア甲子園において、難病と闘う子どもたちとその家族をアテンド
* 障がい者支援施設「こころみ学園」のワイン醸造所、ココファーム・ワイナリーの収穫祭をお手伝い
* 児童養護施設「鐘の鳴る丘少年の家」で子どもたちと交流
* 投稿写真1枚につき、ジョンソン・エンド・ジョンソンが支援団体に1ドルを寄付する Donate a Photo の運営管理

と一緒にスノボを楽しむボランティア／一番町特別養護老人ホーム利用者との散策会ボランティア／ファミリーハウス清掃ボランティア／馬や騎乗者との触れ合いを楽しもう／アイマスク体験／ゴミ拾い（表参道・水道橋駅周辺ほか）／児童養護施設の子どもたちと思いっきり遊ぼう／英語のお手紙を翻訳〜人のためになって、自分も英語力アップ！〜／ピカピカに掃除して、病気のお子さんとご家族に笑顔を届けよう！（ドナルド・マクドナルドハウス清掃）／子どもたちが遊ぶ障がい児保育園をキレイにしませんか？／街歩きマップ作製ボランティア／買う＆食べボランティア／復興支援ドキュメンタリー映画「さんまとカタール」上映会／カード一枚からできるボランティア／補助犬（聴導犬）の音のトレーニング／公園チャレンジテニス！／「タッピングタッチ」を学んで、高齢者施設の利用者さんと交流を深めよう！／「SOS 子どもの村 JAPAN」（福岡）での施設整備ボランティア／ビーチクリーン／上野公園でのハーベストランチ（炊き出し）の準備・配膳ボランティア活動／大森授産所　ボウリング大会／桜岡小学校チャレンジテニス！／バントリー食品仕分けボランティア活動／稲岸公園　清掃ボランティア／清水ヶ丘地域ケアプラザチャレンジテニス！／【親子参加限定】社会福祉法人 豊生ら・ぱるか見学・久遠チョコ製造体験ツアー／キッズセミナーのサポートボランティア／法務手作りボランティア（ランチマット、カレンダー、ちぎり絵、連絡帳作り）／シリア難民支援物資の箱詰め、梱包作業ボランティア／全国シェルターシンポジウムでの運営ボランティア／【4 年目までの新卒者限定】New Grads Volunteer event ／一つ森公園での清掃（秋田市）／清周寮ホームカミングディボランティア／みんなでつくるバリアフリーマップ〜全国一斉まち歩きイベント〜（佐世保、松江、岐阜、鎌倉）／「第 15 回福祉まつり」運営ボランティア／ドナルド・マクドナルド・ハウス

* TOMODACHi J&J 災害看護研修プログラム
  └ 公益財団法人　米日カウンシル－ジャパン
* 災害時母子救護ネットワーク構築のための人材育成プロジェクト
  └ 特定非営利活動法人　地球の楽好
* フードバンク事業と子ども食堂との連携モデル構築
  └ 認定特定非営利活動法人　フードバンク関西
* 食事サービス団体による「共食・多世代共生の通いの場」推進プロジェクト
  └ 一般社団法人　全国老人給食協力会
* DV 被害者支援の質向上に向けた人材育成とコミュニティ形成プロジェクト
  └ 公益財団法人　東京 YWCA
* 視覚障がい児童のスポーツの効果測定事業
  └ 特定非営利活動法人　日本ブラインドサッカー協会
* 日本国内における人身取引被害者支援プロジェクト
  └ 特定非営利活動法人　人身取引被害者サポートセンター ライトハウス
* 貧困問題への理解促進プロジェクト
  └ 認定 NPO 法人　自立生活サポートセンター・もやい
* 「ことばキャンプ」インストラクター養成プロジェクト
  └ 特定非営利活動法人　JAM ネットワーク
* 「養親ペアレンティング研修プログラム構築」および研修を担う「ペアレンティングトレーナー」の養成、特別養子縁組の啓発キャンペーンプロジェクト
  └ 特定非営利活動法人　フローレンス

チャリティリレーラン／クリスマス★サンタ ボランティア（キーホルダー・クリスマスカード作り）／熊本「テクノ仮設団地」に緑のカーテンを設置しよう／外国ルーツの「子ども学習支援」／未来トーク（高校生への講演）／りんご農園での作業（秋季アグリサポート事業）

JJCC が助成した非営利団体とそのプログラム

* 患者家族滞在施設（ファミリーハウス）ハウスクリーニングガイドライン策定事業
  └ 認定特定非営利活動法人　ファミリーハウス
* 2017 年度学童保育施設等への大学生ボランティア派遣プロジェクト
  └ 特定非営利活動法人　鎌倉てらこや
* 復興公営住宅地域における子ども・若者のセーフティーネット構築プロジェクト
  └ 特定非営利活動法人 TEDIC
* 教員支援ルーブリック開発プロジェクト
  └ 認定 NPO 法人 Teach For Japan

Modest Grant 支援団体一覧（ジョンソン・エンド・ジョンソングループ社員による自発的な社会貢献活動に対する少額寄付）

* 特定非営利活動法人 ルーム・トゥ・リード・ジャパン
* 公益財団法人 ドナルド・マクドナルド・ハウス・チャリティーズ・ジャパン
* 社会福祉法人 岐阜羽島ボランティア協会
* 社会福祉法人 いのちの電話
* 特定非営利活動法人 RDA横浜
* 公益財団法人 AFS 日本協会　富士山支部
* 特定非営利活動法人 アスデッサン
* 特定非営利活動法人 障がい児の積極的な活動を支援する会 にわとりクラブ
* 特定非営利活動法人 北海道障がい者乗馬センター
* 認定特定非営利活動法人 かものはしプロジェクト
* 特定非営利活動法人 生態工房
* 特定非営利活動法人 SOS 子どもの村 JAPAN
* 一般社団法人 OSAKA あかるクラブ
* 認定特定非営利活動法人 難民支援協会
* NPO 法人 くまもと未来ネット
* 認定特定非営利活動法人 グッド・エイジング・エールズ
* 特定非営利活動法人 ぷれいす東京
* 認定特定非営利活動法人 トラッソス
* 社会福祉法人 今川学園
* 一般社団法人 スペシャルキッズサポート振興協会
* 社会福祉法人 鐘の鳴る丘愛誠会 鐘の鳴る丘少年の家
* セカンドハーベスト・ジャパン
* 特定非営利活動法人 南三陸ミシン工房

TOPIC

Asia Pacific Contributions Committee
社会貢献親善大使日本代表
金井悠介（MED バイオセンスウエブスター事業部）

ジョンソン・エンド・ジョンソンが運営する、アジア・パシフィック地域の社会貢献委員会を統括する APCC では、自ら積極的に社会貢献活動に取り組む社員を各国・地域から1名ずつ「APCC 社会貢献親善大使」として任命。2017 年は金井悠介が日本代表に選出されました。北陸勤務時代に限界集落を支援、千葉勤務時代にも積極的にプログラムに参加し、ライフワークとしている海外教育支援では昨年ミャンマーに 60 足の子どもの靴を届けました。今後の活躍に期待です。

JJCCが助成した非営利団体数

計 **37** 件

非営利団体のプロジェクト助成団体数および寄付金額

14 件　**70,122,572** 円

Modest Grant* 支援団体数および寄付金額

23 件　**8,420,000** 円

*ジョンソン・エンド・ジョンソングループ社員による自発的な社会貢献活動に対する少額寄付

リサイクルを目的に回収された使い捨てコンタクトレンズの空ケース

67,800 個

社内に設置された社会貢献自動販売機「夢の貯金箱」による寄付金

600,000 円

社員のボランティア参加人数および参加プログラム数

述べ **4,500** 人　計 **146** 回

2017年の数字で見る社会貢献活動

Donate a Photo の総投稿数および投稿を通じて拠出した寄付金額

74,751 枚

8,200,000 円

Operation Smile* 関連の寄付金額

2,890,000 円

*口唇口蓋裂などの顔面奇形の障がいがある子どもたちに無料で手術の機会を提供している非営利団体

ヘルシー・ソサエティ賞で日本赤十字社に寄付した金額

10,000,000 円

熊本地震復興支援（社員からの募金を含む）金額

5,000,000 円

2017年に拠出した支援総額

100,678,717 円

Johnson & Johnson
FAMILY OF COMPANIES IN JAPAN

発行者　ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会
〒 101-0065　東京都千代田区西神田 3 丁目 5 番 2 号
☎ 03-4411-6720　FAX 03-4411-6794　http://www.jnj.co.jp

本レポートの中の写真を他の用途で利用することはご遠慮ください。
また、本レポートの内容をご利用になりたい場合は、上記連絡先までご相談ください。 ©JJCC2018

明日を変えるチカラ

ジョンソン・エンド・ジョンソン
社会貢献レポート2017